



無断欠席するのはだれか？

- OECD加盟国全体で、生徒の18%はPISA調査前の2週間に少なくとも1回は授業を欠席し、15%は同期間中に1日以上、学校を欠席した。
- 成績優秀な学校システムでは、授業又は学校を欠席する生徒はほとんどいない。
- OECD加盟国の生徒たちでは、授業の欠席は数学的リテラシーの得点が32点低いことと関連付けられ、学校の欠席は得点が52点低いことと関連付けられる。
- 無断欠席は、恵まれている、いないにかかわらず、すべての生徒たちに見られる。

ティーンエイジャーはどこまでもティーンエイジャーである。そして、子供時代と成人期の間のあの不確かな領域にあつて、規則が破られるのは必然である。多くの国々で、これが生徒たちの無断欠席につながる。しかし、15歳の生徒たちが授業や学校を欠席しないことを選ぶ国々もあり、それは、生徒たちが教育の重要性を理解し、親や教師たちが学校との、また学校での生徒たちの関わりを深めさせていることから、あるいは、学校システムで無断欠席が黙認されないことを徹底しているからである。

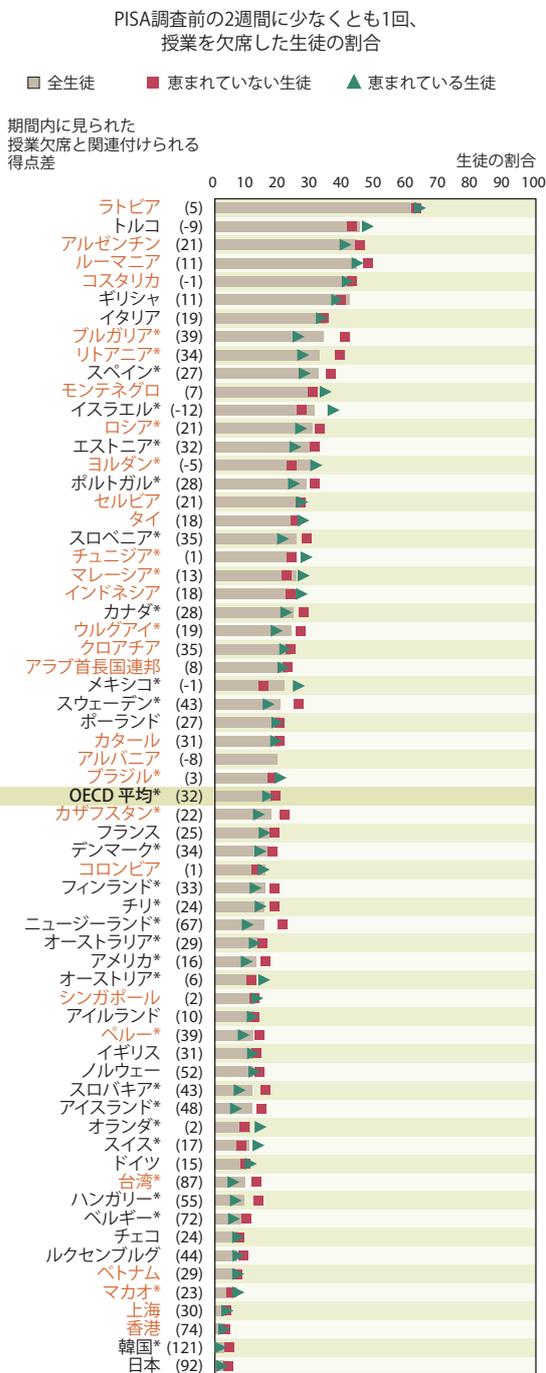
PISA2012年調査に参加した生徒たちは、PISA調査前の2週間に無断で授業又は学校を欠席した回数の報告を求められた。OECD加盟国全体で、PISA調査前の2週間に生徒の18%は少なくとも1回は授業を欠席し、15%は少なくとも丸1日、学校を無断で欠席した。アルゼンチン、イタリア、ヨルダン及びトルコでは生徒の40%以上が学校を少なくとも1日欠席した一方で、アルゼンチン、コスタリカ、ギリシャ、ラトビア、ルーマニア及びトルコでは、生徒の40%が少なくとも1回は授業を欠席した。アルゼンチン、ギリシャ、ラトビア、ルーマニア及びトルコでは、生徒の4%以上がそれまでの2週間に5回以上、授業を欠席したことを報告し、アルゼンチンとトルコでは、生徒の7%以上が同期間中に5日以上、学校を欠席したことを報告した。ほとんどの国で、恵まれている生徒とそうでない生徒との間で無断欠席率の違いはごくわずかだった。例えば、OECD加盟国全体で、恵まれない生徒たちの19%が授業に欠席したことを報告したのに対して恵まれている生徒たちでは17%で、学校の欠席については、恵まれない生徒たちの18%が欠席したことを報告したのに対して恵まれている生徒たちでは12%だった。



PISA

IN FOCUS

いずれの背景においても、
多過ぎる生徒が授業を欠席している



PISA調査前の2週間に授業を欠席したと回答した生徒の割合の大きい順に、上から国・地域名を並べている。

「恵まれていない生徒」はPISA社会経済文化的背景指標の下位1/4の生徒を指し、「恵まれている生徒」は同指標の上位1/4の生徒を指す。

注：国名の後のアスタリスク(*)は、社会経済格差が統計的に有意な国であることを示している。

出典：OECD, PISA 2012 Database, Table III.2.2.a.

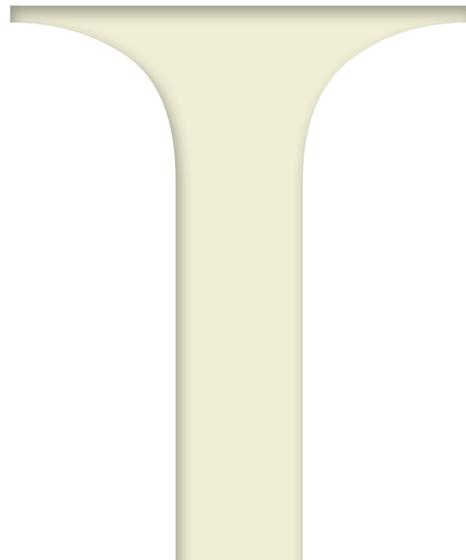
StatLink <http://dx.doi.org/10.1787/888932963920>

無断欠席は数学的リテラシーで余り振るわない
生徒の成績と関連付けられ…

PISA調査前の2週間に少なくとも1回授業又は学校を欠席したことを報告した生徒たちは、授業も学校も欠席しなかったと報告した生徒たちよりも、得点が低い。OECD加盟国全体で、授業の欠席は数学的リテラシーの得点が32点低いことと関連付けられ、学校の欠席は得点が52点低いことと関連付けられる。日本、韓国及び台湾において、授業に欠席したことと関連付けられる得点の差は80点以上であり、ハンガリー、日本、韓国、ニュージーランド、上海及び台湾では、学校を欠席したことと関連付けられる得点の差も80点以上である。ブラジル、コロンビア及びイスラエルを除くすべての国で、授業又は学校を欠席したことを報告した生徒たちは、そうしなかったと報告した生徒たちよりも、成績が悪い。

…無断欠席率が高いと、学校及び学校システムの
成績に影響が及ぶ。

生徒の無断欠席は、学校システムの全体的成績とマイナスの関係がある。OECD加盟国全体で、一人当たりのGDPを考慮すると、学校を無断欠席する生徒の割合が高い学校システムは、数学的リテラシーの得点が低い傾向がある。一人当たりのGDPによって評価した経済発展のレベルにおける違いを考慮すると、OECD加盟国全体の数学的リテラシーの成績における差異の16%は、学校を欠席する生徒の割合における違いで説明できる。(これに対し、例えば、香港、日本、韓国、上海など、成績優秀な学校システムのほとんどで、授業又は学校を欠席する生徒はほとんどいない。)





このマイナスの関係は学校レベルでも見られる。29の国と地域において、授業又は学校を欠席する生徒の多い学校は平均成績が振るわない。クロアチア、日本、韓国、オランダ、ニュージーランド、スロベニア、台湾及びベトナムでは、生徒と学校の社会経済的地位及び人口統計的背景、その他の多様な学校の特徴を考慮しても、そのような生徒の割合が10%増えることが、学校の数学の平均成績において10～34点の得点の低下につながっている。日本と韓国では、そのような生徒の割合が10%増えることが、学校の数学の平均成績においてそれぞれ22点及び25点低下することにつながっている。日本では生徒のほぼ7%、韓国では9%が、PISA調査前の2週間に1割以上の生徒が、少なくとも1回学校又は授業を欠席していた学校に通っている。これに対し、OECD加盟国全体では、平均して生徒の73%がそのような学校に通っている。

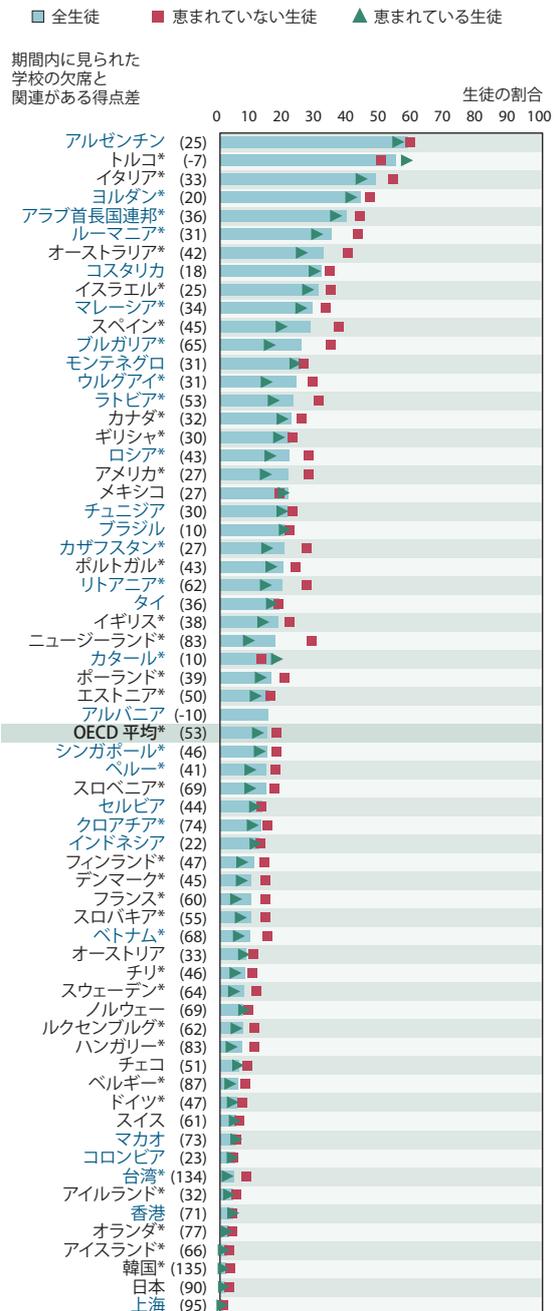
それでも、すべての家庭と学校に、生徒たちの学校との関わりを増やす手段がある。

PISA調査から、生徒たちの学校との関わりを深めさせることによって、無断欠席率の引下げに学校と家庭が貢献できることが明らかになっている。OECD加盟国全体の平均で、規律環境の優れた学校に通う生徒たちは、PISA調査前の2週間に授業又は学校を欠席したと報告する可能性が5%低い。また、数学の成績が同等の生徒間で比較すると、ほとんどの教師と関係が良好であること、ほとんどの教師が生徒の生活状態に関心をもち、言いたいことを本気で聞いてくれること、必要に応じて教師から特別な助けを得ていること、ほとんどの教師が生徒たちを公平に扱っていることを報告した生徒たちは、学校に遅刻する可能性がOECD加盟国全体の平均で5%低く、PISA調査前の2週間に授業又は学校を欠席したと報告する可能性が4%低い。

利用可能なデータのある11のうち8の国と地域において、いつも両親と夕食をとる生徒たちは、授業又は学校の授業日に欠席している可能性が低い。両親は、子供に対して高い期待を抱き、そのような期待を本人に伝えることによって、子供たちが無断欠席する可能性を低くすることができる。

学校の欠席は、より悪い成績と関連がある

PISA調査前の2週間に少なくとも1回、学校を欠席した生徒の割合



PISA調査前の2週間に学校を欠席したと回答した生徒の割合の大きい順に、上から国・地域名を並べている。

「恵まれていない生徒」はPISA社会経済文化的背景指標の下位1/4の生徒を指し、「恵まれている生徒」は同指標の上位1/4の生徒を指す。

注：国名の後のアスタリスク(*)は、社会経済格差が統計的に有意な国であることを示す。

出典：OECD, PISA 2012 Database, Table III.2.2b.

StatLink <http://dx.doi.org/10.1787/888932963920>

